
魔法と魔術の転生劇

池上

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法と魔術の転生劇

【Nコード】

N3501S

【作者名】

池上

【あらすじ】

第一部 世界を変えて思いっきり楽しもう！という少年。その影には世界を修復しようとする者がいた。

第二部 褐色の紅き騎士は機械と出会い、別の世界に放り込まれた。その世界の主人公は自分の進むべき道に迷いを感じていた。何の関わりも無いツンツン頭の少年は唐突に始まった非日常に混乱した。

これは、混沌となった世界に生きる、限らない主人公達のお話

第一部 廻る世界（前書き）

懲りずにまた書きちゃいました

第一部 廻る世界

「マジスか?!」

目の前の青年の言葉に俺は思わず声を荒げた。

いきなりだが、俺は既に死んでしまったらしい。工事中のクレーンが風に煽おおられてぶちゅつと潰された事は覚えている。

まあ、よくある二次創作のテンプレ通り、神のいるとこに来て転生させてくれるという話になった。

「どんな世界が良い？ 何処でも飛ばそう」

目の前の銀髪中世的な顔立ちで神々しい雰囲気きんぎょの青年が、いわゆる神らしい。

口調は穏やか且つ威厳があって本当に神様っぽいな。

「そのような事はどうでもいいだろう。さっさと決めろ」

「あ、やっぱ心とか読めました？ それじゃあ……ネギまの世界で！」

なんつーかナギさんカツコイイだろう。まあ、息子さんはアレだけだ。

あの世界で一緒に無双とかしてえな。

「死亡フラグが多いが、望む力はあるのだろうか？」

「もちろん！ まずはナギの魔力とラカンの気だろ。不死身性+瞬間記憶能力もつけて、スキマを操る能力に治癒能力、アニマルマスタート、あつFateの無限剣製とEXTRAの皇帝特権EXもつけて……あとは保身の為に幻想殺イマジンプレイヤーかな？ それで！」

別に抑える気は無い。好き勝手にやらせてもらおう。

「ふむ。無限剣製と幻想殺しは難しいが……少し待て。出来たぞ」

そう言うと突如力が漲ってきた。が、直ぐに治まる。馴染んだのか？

「早速だが、送ろうか」

「えっ、もう!? 神様。このチャンス無駄にはしません。

本当にありがとうございます!」

「感謝は良い。礼を言いたいのなら、存分に楽しみ、存分に力を振るい給え」たま

その言葉を最後に、視界が暗くなった。

「さて。アイツが行った事だ。こちらも存分に傍観するでしょう」
あの者は本当にお頭こぶが弱かったらしい。

私が殺したなど思いつかなかったとは。

まあここに至った以上暇な日があるのは覚悟しなければならぬが、暇なものは暇だ。暇つぶしに大いに役立つてくれよ。転生者君と、台座を用意して画像を見ようとした時、

ズドツと肩に何かが刺さった。十字架の形でそれぞれ先が尖って

おり一番長い柄の部分にリングの取っ手がついた剣のような物だった。

再生能力により痛みは薄い上に即座に解析しても何の神秘も無いただの時計の針……？

理解できない所に続けざまに時計の針が飛ばされてくる。

「流石というべき」

生きてきた人生で聞いた事のない無機質な声。無機質な声自体は聞いた事はあるが、それはまだ生物らしかったし、ちゃんと矯正すれば治るぐらいだった。

だがこれは何だ？

まるで本自身が声を出して自身に書かれた文を読んでいるようではないか。

「トレース・オン
投影開始ッ！」

即座に投影したサーベルで時計の針を弾き、針が投げられた方向へ魔弾を飛ばす！ 当たった様子は無い。身震いを感じ、直感で横に飛びのく。

自分がいた場所がクパアと空間が縦に裂け、ついに声の主が姿を現す。

私見は、12歳ほどの中性的な顔つきの少年。いや、もしかしたら性別自体が無いのかもしれない。少しダボついた服装でお世辞にも似合っていると言えない。冷や汗を掻くほどの感情のない瞳がこつちをジッと見つめていて、その小柄な手には丸みを帯びたひし形の時計の針が。

「一緒に巻き込まれれば良かった」

「っ、誰だ貴様はッ!?!」
「わかりません」

意味のわからない返答に思わず、はあ!?!と素っ頓狂な声を出してしまった。表情一つ変えずに侵入者は淡々と告げる。

「私には正式な名称はありません。ある者は神と呼び、ある者は破壊者と呼ぶ。ただそれだけ。あなたの場合は『殺し屋』でしょうか」

今の説明である程度わかった。

目の前の人間は転生者かその類。目的は私のような存在の抹殺!

「甘く見るな! 『重力×10』!」

自分の周り以外の重力を10倍にする。言わずもがなドラゴンボールのアレだ。

急に体が重くなった事に対応できずにガクンツと体制を崩したところに斬撃を叩き込む!

「ロンドン塔の時計から拝借した指針。とても使い勝手が良い」

左手の時計針を右肩辺りに回して、一気に振り下ろした。10倍の重力をも飲み込む衝撃波が襲い掛かる。

が、そんなものは通じない。ここは私の空間だ。消し去る事など造作でもない。

衝撃波は無かったように霞に消え、

「……私を壊せません」

サーベルの一撃は当たった。その証拠にもヤツの顔は欠けている。が、ビデオの逆再生のように顔は修復していった。

平然と針を構えるヤツに一抹の恐怖を覚える。早くヤツを排除したいが……。

「重力に重力を加えればどうなるか、貴様にはわかるよな？」

重力に重力を重ねる。その負荷は空間をも歪ませて非常に強い重力場を発生させる『孔』を作り出した。

その孔をブラックホールと呼ぶ。

光さえ抜け出せない渦から離れようとするが、遅い。

ズオンツと音も残さずに消えていった。

ふう、とため息を吐く。この数十年抱く事を忘れた感情がこみ上げてくる相手だった。

「感想。油断のしすぎかと」

耳元で聞きたくない声に身を固めてしまい、反応するのに時間がかかった。

ズドツ！と喉、肩、その他数箇所時計の針が突き刺さった。

体も動かせない。何らかの力が働いているようだ。

「強大な能力ちからを手に入れ、根源に辿り着き、また己の欲の為に能力ちからを分け与え鼠算的に増えていく。増えたからには消えてもらわないとバランスが取れなくなるので」

「ま、待て！！ 俺は偉業を立てた、世界を救った！！ その英雄を殺すだ！？ 俺を転生させた神が黙っていないぞ！！」

「メッキが剥げた愚者。勘違いばかり。貴方が介入しなくてもいずれ救われる世界だった。貴方はさらに混乱を招いた。何処が英雄な

のか。さらに言えば貴方を転生させた異端者は私が処刑した」

絶望的な単語を聞き、口をパクつかせ、脂汗を浮かべて言葉を探す。

「おま、お前も、平和を願って、動いているのだろう……？ だつたら手を組もうじゃ」

「勘違いばかり」

ヤツの口から発せられる音はどう転んでも絶望ばかりだった。

「私が守っているのは平和ではない」

針を持ってゆっくりと寄って来るヤツを止める術は、ない。

「私が守っているのは、秩序です」

死神の鎌は、言い終わつた瞬間に振り下ろされた。

バクテリアのように自然に発生し、単純な行動だけを取り、世界の不純物を排除していき、自然に消えていく。自然に従い動くのが自分。

破壊と再生を繰り返し、確実に異分子^{ふじゅんぶつ}を屠^{ほふ}る。それが自分。今更自分を変える必要も無い。コレだけの力があれば充分だ。

「……取り逃がしました」

自分が来る前に一人、また転生者を送り出したようだった。

前回の再生に比べてスペックはかなり拙つたまいが、新参者の転生者に遅れを取る筈はない。

「新たな転生者を抹消せよ」

ブウンと姿がブレて、肉と骨の塊に成り果てた『神を名乗る転生何者者がだったもの』以外いなくなった。

第一部 廻る世界（後書き）

出来がイマイチですね……

語り部とマリオネットの演武(前書き)

やっと………書けた………

長らくお待たせしました

第二話、お楽しみください

語り部とマリオネットの演武

新たな転生者^{ファール}は剣と魔法^{ファンタジー}の世界に降り立った。後を追う者の影に気付かずに。

物語の歯車は急速に動きだした。

「ふあゝ、やっと来れたぜネギまの世界へ！」

あの空間から出た俺がまず始めに叫んだ言葉は端から見れば変人に見られる、そんな単語の集まりだった。

まずはナギを探して紅き翼^{アラルフロ}に入って原作介入だ！

その時気付けなかった。

「……………本当に、とるに足らない存在です」

あまりにも無機質な声に反射的に振り向いた。背筋に氷を押し付けられた感触が全身を貫き、直後、脇腹に強烈な痛みを感じた。

「い……………？　ぎあああああああああ！？」

渓谷に近いこの場所では俺の声はかなり大きく響く。

脇腹辺りを覗き見ると、自分の腕ほどの長さがある剣みたいなものが突き刺さっていた。痛みのがあまり脇腹を押さえる。ジクジクした痛みは止まる事無くどんどん広がっていった。

振り向いた先にいる人物は、全く見覚えが無い、伏せ目気味で小柄で中性的な顔の人間。ゾツとするような感情の無い瞳がこちらをジロリと睨みつけている。

感情の無い機械的な音程が、そいつの口から漏れてくる。

「探しにくい次元に飛ばしたものです。まったく手間がかかる」

感情が無い音程で喋る　いや、音を出すと言った方が正しいかもしれない　に言い切れない恐怖を感じ、直ちに逃走を図る俺。

渓谷には民家は無く、助けを呼んでも来ない気がする

何故だ？

何故俺は逃げようとする？

あの神様からチートな能力をもらったのに？

「……そうだそうだよ！　今の俺はチートなんだ！　お前がなんだろうと怖くねえ！」

ただの見栄っ張りだったかもしれない。だが、そう叫ばずにいられなかった。

対して、奴の反応はとても薄い。

「所詮自分で搦んだものでもないくせに」

「黙れ黙れ黙れ！！　これは俺の力だ！　トレース・オン 投影開始！」

昔憧れたキャラクターの決め台詞を叫び

何も起こらなかった。

「はあ！？ まさかあの野郎手エ抜きやがったのかよ！？」

「それがあなたの力……」

音域に高低はない。が、雰囲気的に見下されているかのようだ。何で投影が出来ないのかわからない。けど、俺の能力はまだあるはずだ！

「スキマよ開け！」

何も起こらない

「お前の能力は俺のものだ！」

何も起こらない

「命あるものよ！ 俺に手を貸せ！」

何も起こらない

「光の精霊11柱 集い来たりて 敵を射て！ ”魔法の射手”
連弾・光の111矢！！」

何も起こらない

「ラカンインパクトオオ！！」

何も起こらない

「超かいふっ！？」

とつくの昔に傷ついているが回復の兆候が全く無い。
神から貰った力の全てを試したが全て結果は同じ。

何も、起こらない。

「……」

付き合っていていられなくなったのか、無言で丸みを帯びたひし形の
剣のような物を取り出した。

言葉にならない叫び声を放ち、俺は走り出した。

いやだ！ 折角チャンスを買ったんだ！ ここでみすみす殺され
てたまるか！

「……」

ズドっ！ という鈍い音が、今度は右太ももから。

「なんだよお……、なんでだよお……、」

嗚咽が出た。きつと今の顔はぐしゃぐしゃになっているだろう。

何で俺はこんな理不尽な目に遭わなきゃいけないんだ。俺はただ
『 』 になつてみたかっただけなのに。何かやる前にこんな

ところで1人死ぬのなんてまっぴらだ！

「……」

奴が剣のような物を振り上げ、

「うわあああああああああああああー！！」

最後の抵抗となるだろう、無意味なのに手をバタつかせる。その拍子に手が奴の剣のような物を持つ腕に軽くぶつかる。

そう。右手に。

ベキツ！ と悲鳴に似た音が、誰もいない溪谷に悲しく響いた。

発音源は奴の片腕。

「……まさか、幻想殺しイマジンプレイカー。この世界には過ぎた力」

片腕が無くなった所で、奴の音域に変化は全く無いが、

「抹消せよ」

何かが変わった。

奴は円盤を取り出し……、いやあれは時計盤じゃないか？ 一体何をする気が目を見張る。

……って、そういう場合じゃない！ 速く逃げないと殺される！ 俺の唯一の武器は右手だけだ。リーチも短い。威力も無い。弱点も多すぎる。良い所無しも良い所だ（冗談じゃないぞ冗談では）。だけど、今の俺にはとても心強い武器になる。本当に保身になったな。

「『せめて時を動かす歯車ギアとなれ』」

聞いた事がない呪文を口にした瞬間、時計盤はバラバラに崩れ、パーツの一つ一つが分かれる。

そのバラバラのパーツは宙に浮いたままで留まりとど、あろうことが奴はそれを投げつける。パーツの一つ一つが小さく、当たるとチクチクした痛みが襲う。

そして、俺がパーツ群の中心に迫った時、事は起きた。

パーツが時計の逆再生のように戻っていく。その中心は俺……！

「こんなのありかよ！？ でも……っ」

適当に手を振り回せば右手にパーツがピシピシと当たってポトンと力なく地面に落ちていく。当たり漏らしが体のあちこちにめり込んでいるが、被害が少ない分それでよかっただろう。

「無駄な抵抗。しなければ楽になりましょう」

無意味かもしれない。楽になれば良いかもしれない。けど、

「それでも、俺は諦めたくない！」

俺の言葉は全く理解できていないだろう。ただ無言で手に持った剣のような物で突き刺そうとする。

その時、視界の端っこで光り輝く何かが迫ってくる。

「あぶねえ！？」

「

音がかき消され、視界は真っ白になり、体中にピリピリした痛みが走る。

「おいおい随分と物騒な世の中になっちまったなあ。だが一方的なんじゃないか、こりゃ？」

「はは

視界が晴れてきた時、始めに目にしたのは、赤い髪色。木の幹のように曲がった形の杖。あの青年は

「まつ、目の前で弱いものいじめが起こってんだ。そいつよりもナギ・スプリングフィールド様と相手した方が楽しいぜ？」

「貴方の相手をする『時間』はありません」

ナギの名乗りにも、熱くも冷たくも無い平坦な音程で返した。無視すんなコラ！ と遠くから聞こえてくるがそれも無視し、片手に掴む剣のような物を振り降ろそうとする。今度こそ殺されるだろうが、

その運命は一瞬で打ち砕かれた。

グキヤ！ と凄まじい打撃音がした後、奴は消え去ったのだ。

「大丈夫ですか？ …… どういう戦い方をすればこうなるんです？」

ナギと奴の目で追えないバトルを、呆然と眺めていた俺の真上からローブで顔が見えない人間が降りてくる。たしか、アルビレオ・イマだったか。

「動かないでください。今治療します」

「止めてくれ。まだ俺にはやらなきゃいけないことがある」

立ち上がる俺を見て、慌てて治療魔法を掛けるが、バキン！と

構築された術式が壊された。

「なっ！？」

驚いているが今はどうでもいいことだ。

ナギが雷の暴風を奴のどてつ腹に叩き込んだのに、直ぐにビデオの逆再生のように修復してしまった。幻想殺イマジンブレイカーしで破壊された腕以外は。

……奴の力は一体何なんだ？

不死性に時計を使った攻撃、それに何で俺の能力が使えなくなっ
た？

だが、

「勝機はあるな」

どうなっただこりゃ？

いくら攻撃しても直ぐに再生しやがる。新手の吸血鬼か？

それに表情も変えないし感情も見えない。移動もただ歩いてくる
だけ。……攻撃を当てても一定の速度で迫ってくる。

なんつー不気味な奴だ。

「『長針』」

やけに短い詠唱の次に長い時計針が凄まじい速度で襲う。ただし直線的だから避ける必要も無い。杖で弾いた。……恐らくこれは伏線だったんだと後から後悔した。

チラツと目の端に映ったのは偶然だったのだろうか。奴の手にはさっきの針と同型の短い針が2本。

また投げてくるのか！？ と身構える。

しかし、針は落とすように放られた。

「『短針、秒針、3本一対』」

放られた針は重力を無視して、真っ直ぐ俺に目掛けて飛ばされた。これも直線的で簡単に避けれる。

瞬動で距離を詰めて、もう1回腹に大穴開けてやる！

「……千の呪文サウザントマスターの男の称号が泣きますよ」

背中に鋭い痛みが走り、さっきの短い針も弾いた方向から襲ってきた。視界に入った瞬間に杖で弾くが、また浮き上がって矢のように襲ってくる。

「どうなってやがんだ?! こんな魔法見た事ねえぞ!」

「ナギっ!」

遠くから様子を見ていた詠春が俺の傍に寄って針を叩き壊してくれた。癩だが、協力しなきゃこいつから少年あいつを助けられねえ。

「詠春、こいつかなり強え」

「わかってる。始めから全力だ!」

そう言つと、鏢つばの無い特徴的な野太刀を大きく振る。

神鳴流奥義 斬魔剣。

己の気を放出して物体をすり抜けて魔を討つ剣。だったか?

まあ時計針をすり抜けてザックリ斬られた訳なんだが、また逆再生して元に戻ってしまうんだよなあこれが。

「(詠春。同時に行くぞ)」

「(了解!)」

ズボツと背中に刺さった針を抜いて、瞬動で奴の背後に周る。片手でまた出した針を回すが、俺は簡単に避けた。つか時計の針を武器にするなんてどんな頭してんだ? 『突く』しか攻撃方法がね

えだろ？

さっきの仕返しとばかりに針を脳天にブツ刺して、そのまま雷撃を流した。

雷の電流は桁が違う。刺さった針はひしゃげ、奴の頭は文字通り爆発する。……グロイ。

さらに念を入れ、詠春が最高に気を込めた雷を放つ技と俺の千の雷でフィニッシュだ。

もう奴のいた所は焦土と化し、塵が舞うだけの場所

「化物が」

奴は、まだ立っている。塵が集まって、人の形を取ろうとする。

そう、まるで

「ビデオの巻き戻しみてえだな」

「あながち間違っていないようだぞ。見ろ、周りの地面も戻っている」

そう言われ注意深く観察すると、奴の立っている地面に草が生え、自然に枯れてまた草が生えるという現象を繰り返している。

「ナギ、俺の憶測でありたいんだが、もしかしたら奴は時を操る力を持っているんじゃないか……？」

「ありえねえ、って言いてえけどよ。今回ばかりは常識が通用しない相手だろうな」

驚異的な再生力　その正体は時間を巻き戻して怪我を無かつた事にするという反則技。時間を操る力はどんな力か知らない。とんでもない隠しだまを持っているだろう。こんな奴、どうやれば倒せるんだ……？

「（ナギ、詠春。少しお話が）」

どう相手しようか頭を捻ってる、アルから念話が飛ばされる。何か秘策を思いついたのか？

「（ええ。簡単に説明します。それが再生する前にこっちに投げ飛ばす事。それが秘策です）」

??? つまり、アルが止めを刺すって事か？

しかし、奴はもうとっくに復活してしまっている。だったら、

「もう一回壊れやがれエエエえええええええええええええええええ
！！」

全力全開の千の雷を放ち、視界と音がかき消される。俺は直ぐに砂埃の中突っ込んで、手探りで奴を探した。

「無駄。これでは効かない」

いた。

顔が半分以上無くなり、体の下半分が消し飛んだ状態でもなお動いている。

「千の呪文の男。何故あの異分子を庇う。世界を狂わす存在を。抹消すれば少なくともこの魔法世界の寿命が引き伸ばされるぐらいのメリットはありますが」

「うっせえ。あいつが何モンなんてどうでも良い」

サウザントマスターなんて言われた事がないが、なかなか良い二つ名じゃねえか。

わずかな抵抗を見せる奴の頭を鷲づかみし、大きく振りかぶって、

「どんな理由だろうと！ 人間が食い潰されて良い道理なんて、ねえんだよー！」

アルのいる方向へ投げつけた！ ……つて。

「アル！？」「」

俺たちの仲間、アルビレオ・イマに投げつけた、奴の進行方向に誰かが立ちふさがっている。

傷が全く癒えていない『彼』が、右腕を突き出し待ち構えている。

剛速球に等しい奴の体を片腕で受け止めるなんて不可能。アルの奴何考えてんだ！？

そして、ゴギンっ！と人間が出すべき物ではない音が溪谷に響いた。

「う、おおおおおおおおおおおおおおっつっ！！！」

『彼』の腕は『奴』の頭に叩き込まれ、『彼』の右手が投げられたベクトルに負けて肩の関節が外れたかと思うぐらいに後ろに反る。

「……やはり、失敗……！」

「いや、成功だよ」

彼はボロボロ。俺たちはそこまで酷くはないがやはりボロボロ。ここで奴が立ち上がったなら完全に負けだ。

しかし、顔が砕けた奴はもう復活しない。

「無茶すんなあお前。どうせなら俺達の仲間にならねえか？」

「えっ、」

「ちよ、ナギ！（どう見ても怪しすぎるだろ、さっきの奴といい、一撃で葬ったあれとか！）」

「（ナギ、詠春。その事で話があります）」

アルと詠春との間で念話をする。

アルの話を聞くと、

彼の右手にはある種の異能の力が宿っている。それはあらゆる異能の力を打ち消す力だと言った。

アルが出来る限り推理した結果、彼は珍しい力を宿した為は何者かに追われている身ではないか、と。

「（ならば尚更じゃないか。賞金稼ぎに狙われる生活なんてイヤだぞ）」

「（だけどなあ）」

やっぱり俺はこいつを助けたんだから、救ったから後はご自由にさようならなんて間違っている。それに、こいつが俺たちに加わったら戦力にならないだろうけど、匿えば下手に手出しは出来ない。たしかに奴が言ったようにメリットは見捨てる以外にないらしいが、匿ってデメリットも無い。だが、俺達のメリットは人を救えた事だろう。

「（……お前がそういうなら、俺は何も言うまい）」

「（フッフ、貴方らしいですね）」

詠春は渋々と、アルは不敵に笑って了承してくれた。

「もう一度言う。俺達の仲間にならないか？」

「あ、ああ！ そうだ。自己紹介はまだだったな。俺は」

物語は廻る。この先のストーリーが変わろうとも……。

数十年後

火星

徐々に塵が集まりだし、形作っていく。

その輪郭がはつきりしてきて、高さが130cmほどになると、
細部ディテールが作られる。中世的な顔の少年それ。

「……20XX、再生に『時』が経ち過ぎた」

全く感情が見えない音程で口ずさむそれは衣類を身につけず、作られたような不自然に健康的な肌色を惜しげもなく曝け出している。

「『時の流れに逆らう咎人となる』」

出した声に羞恥はない。感情が一切無いのだから。

詩のような詠唱の後にブウンと体がぶれてそこから消え去る。

元『魔法世界』の土地には、誰もいなくなった。

語り部とマリオネットの演武（後書き）

感想などが来たら僥倖です

なんというか、『奴』の技はほとんどオリジナルに考えた技です
わかり辛かったら精進します

あー疲れた

それがソレのあり方（前書き）

話の構成がメチャクチャでした。

初めの部分はほとんど無視して良いです。

それがソレのあり方

魔法世界でもかなり年季の入っているその洋館に、大量の人々が集^こっていた。誰も彼も同じような格好をしている。別に舞踏会を行うわけではない。

ローブを着て、形がそれぞれ違う杖を持っている。

その中で、異彩を放っている人がいた。……いや、それはもう人ではないのだが。

ショートカットで外国人ウケな日本人らしい顔立ちのボーイッシュな少女。どこかの学生服を着ていて、控えめな体型が服装で隠れている。

そして、何より目立つのは、
両腕に鎖が巻かれていて、その先が地面に沈んでいる事だろう。

「貴様が何人殺したか知っているか？」

ローブの人々の中でも位が高そうな男が少女に問い掛ける。

それに対して少女はどんよりと暗く返事を返した。

「もう、ボクの罪が多いのはわかってます。これ以上、増やしたくない……。だから」

「一応は自覚しているようだな。安心しろ。貴様を楽にしてやる」

男は少女の言葉を遮り、軽く手を上げた。『あの、違っ』というか細い声はとつくに聞こえていなかった。

その時、男の側近が近寄り、耳元で囁く。

「（導師様。部下達の士気が下がっております）」

側近に言われて部下を一瞥する。

『あれが「闇の福音」^{ダーク・エヴァンジェル}と並ぶ大悪党なのか？』

『とても見えない……俺の息子と同じぐらいの年じゃないか』

『導師様は何を考えてるんだ？』

彼らの言い分に苛立ちを覚える。始めは悪党退治と言う事で意気揚々と参加した者達だが、いざ来て見ればただの弱気な少女がいるだけ。倫理的にも抵抗が出来ている。

そこで男は、

ズダンっ！と。

鋼の弾丸を少女に撃ち込んだ。後ろから息を呑む雑音がやかましい。

「見よ。これが悪しき者の正体だ」

少女は立っている。薄い胸に銃創がぽっかりと開いたまま。

それを見た瞬間、彼らの少女を見る目が変わった。単純なものだ。今さっきまで哀れな少女だったのにあつという間に畏怖の対象に成り代わった。クツクツと笑い声が漏れる。男の頭の中は偉大な魔法^{マジック}使いになる為のプランでいっぱいだ。

「さあ、始めようか。第一部隊、構え！」

「……いや……」

目の色を変えた集団が一斉に杖を構え、少女に標準を合わせる。後ずさりする少女に向けられる。少女の震える声なぞ耳に入るわけが無い。皆、^{みな}一つの目標^{マジック・マキ}の為に必死こいているから。

無慈悲な詠唱が洋館の前で合唱する。

「イヤだ……イヤだ……！」
少女の悲痛な声が漏れる。手を胸の前で握り締めて、祈る様に懇願した。

ここで一つ間違いを指摘しよう。彼女は一死ぬのが嫌なわけではない《……………》。

「紅き焰!!」

数m大の焰がいくつも重なり合い、大地に立つもの全てを焼き尽くす業火となる。

しかし、

少女の前に突如として現れた、真つ黒い何かが業火の盾となり、少女は無傷だった。

「悪魔をも手なずけるとは、」

流石は死神と言えよう、と言おうとした男の口が『さ』の形のまま固まった。目の前で、部下の1人が糸の切れた人形のように倒れたからだ。声をかけようと男が近づくと、今度は後ろから。

重力に従って物が落ちる音。次第にその音は大きくなり、無くなった。

「やめてよ……ボクはもう殺したくないんだよ？」

頭を抱え込んで黒い何かに懇願する少女。その目には大粒の涙が溢れていた。

男は何も言えない。

何が起きたのか、誰に話しているのか、今生きているのはあの少女が抑えているからなのか、そんな事は頭に入っていなかった。

今すぐここから離れなければ。でないと殺される。

「化物がつ!! 今日所は引いてやるあ!?!」

三下丸出しのセリフを吐いた男は踵かかとを返し、逃走を図る。が、間拔けな声と共に顔からつこけた。

足に、丈夫そうな鎖が絡みついてる。

「……………」

黒い何か低く唸ると地面から同じような鎖が飛び出し、男に何重も絡みつく。ついには地面に磔はりつけにされた。男が抵抗してもギチギチと音を立てるだけ。

黒い影は形を変えて、ドロドロの手の形に変えて振り上げる。

「アヴェンジャー……………もういいよ……………。その人を放して……………」

「……………」

恐怖が、圧倒的な死が、彼を襲った。

「……………ごめんなさい……………!」

ペタンと力なく座り込んだ少女は、物言わぬ死体達に囁く。当然ながら死体は答えない。死人に口は無いから。

そんな彼女を見ても何も思わない。

悲しいともイラつくとも可哀想とも怖いとも、なんとも思わない。むしろ、この感情はなんなのかわからない。

「……………誰?」

「どうやらこちらに気付いたようだ。黒い巨人　あの少女の力の正体、聖杯の泥が振り返って『死』を飛ばしてきた。どういうサイクルなのか、この殺気は濃厚過ぎて浴びただけで死に至る。さっきの人間達が絶命したのはこれの所為だろう。が、そんなもの効かない。体質であり能力であり呪いであるこの体は破損しても、その前の時間に巻き戻される。」

「相変わらずアヴェンジャーと呼ばれた少女の力が殺気を浴びせてくる。そこで自身の武器をアヴェンジャーに向けて、アヴェンジャーの時間を止めた。」

「……あなたは、神の使いか何かなの？」

「知りません。あなたを抹消する存在です」

「そう言い放つと、少女はちよつとだけ救われた表情かおになった。」

「本当に……？　本当にボクを消せるの？」

「声に出さず、コクリと頷いた。」

「……お願い。早くボクを消して！　望んでないのに転生して、逃げようとしたら無理やり縛り付けて……！　こんな苦しみはもう味わいたくないよ！」

「今まで溜まっていたものが次々と吐き出されていく。次第に涙を流して嗚咽をするほどだ。」

「しかし、そんなものがどうした。」

「そんな事を言われた自分はどうすれば良い。」

「少女のマシガンのように飛び出される言葉が終わるまで待つ事にする。逃げる気が無いようだから放置していても大丈夫だと確信」

したから。

正直早く口を閉じて欲しい。次の役目に行きたい。

「本当に消えるわけではありません。転生する時間から今の時間までのあなたの歴史を頂いて、無かった事にするだけ。結果的には消える事になりますが」

「……ボクはもう2回死んでいる、怖くなんかないよ」

懺悔するように手を組んだ少女はそう言った。

その言葉を最後に、少女は消え去った。この世界のひずみと少女がいたと言う事実と共に。

転生してからかなりの時間が経った。あれから奴は襲ってこなかった。

それと、自分の転生の特典能力について考えてみた。様々な能力を買ったが、何一つ機能せず、出来たのは保身用にと買った幻想殺^{イマジンプレ}イカー^{イカー}_{イカー}^{イマジンプレ}だけ。

あれこれ考えたが、結局わからなかった。

「おーい！ 早く行こうぜー！」

考えにふけていた俺を呼び戻したのはナギの呼ぶ声だった。

今、俺達は絶賛戦争に参加中だ。原作と同じ、ラカンとも仲間になってアルギユレー^{アラルツラ}とシルチス亜大陸侵攻から「グレート」ブリッジ奪還戦」。

俺も戦闘には参加した。始め皆は目立つからといって反対したが、何時までも足惑いになりたくないの、時間をかけて説得し、納得させることが出来た。幻想殺^{イマジンプレ}イカー^{イカー}を武器に敵を消し去った。元々奴ら

は魔法世界の幻影いぼつなのだ。軽く触れただけで打ち消す事ができる。罪悪感とか背徳感とか沸く事は無かった。奴らは敵なんだし、今は戦争中だ。殺す殺されるのは当たり前だろう？

「　　っ！……」

「どした？　なんか忘れもんか？」

「……そうだな。ちよつと取りに行くわ」

ナギはそう言って元来た道へ戻っていく。ゼクトや詠春が訝しい顔になっていたのは何故だろうか？

お師匠との手合わせを終えて、また目的地へ進もうとした時、不快感に包まれる視線に気付いた。1人の人間として見てる視線ではなく、お芝居の登場人物を見ているような視線。

そう、不思議な手を持つアイツが俺たち以外の人間を見てる時がちょうどそれに当てはまる。

念話でお師匠達に少し離れることを伝え、アイツには誤魔化して街の中に入るフリをした。1枚80万の転移符を使って人がいない場所まで飛び

「随分と速はやじゃねえか。どんな転移符使ってた？」

と言った所で、奴の能力を思い出した。

伏せ目気味で小柄で中性的な顔の人間。

時間を操る術を持ち、俺達を圧倒した相手。

「あの異分子の事で話がありま　　」

奴が口を開き、異分子と言った瞬間に魔力を込めた拳を思いつき顔面にぶち当てた。すぐに逆再生を始めるが知ったこつちや無い。もう一発腹部を殴ったら半分に砕けた。結構すつきりした気分になった。

「……いくら修復されると言っても、痛いものなのですが」

「知るか、俺の仲間を『異分子』呼ばわりする奴に遠慮はねえ。つか、どん位粉々にすりゃいいんだお前？」

「ある世界の27人中第三位と第四位と戦った時の傷は修復不可でした」

「？」

表情は全く変わっていないが、ひどく疲れている雰囲気は漂っているよう、な……？

「本題に入ります。あの異分子を引き渡してください」

また異分子呼ばわりしたなコイツ。言い切る前に雷の投擲で胴体に風穴を開けた。

これだけの事をやっても奴は反撃一つしない事に少し疑問を覚えるが、あの時も致命傷を負わないような傷ばかりだったしコイツの性格も機械と変わらないから、極力人を傷つけない様になっているだろう。もしくはそういう設定になっているのだろう。

「アイツは一応護衛対象なんだ。アイツを捕まえるつつうんなら容赦しねえぜ」

「元より、私に戦闘の意欲はありません。話があるだけです」

「そーいうのは昔から手っ取り早い方法があるんだぜ。『漢なら拳で語り合え』ってなあー！」

俺が介入しても世界は変わる事無く本来の歴史どおりに進むと思
っていた。

ナギの息子が生まれ、魔法学校卒業後に麻帆良学園で先生やって、
ドタバタのコメディとかやって、京都で生涯のライバル的存在と出
会って、学園祭で未来の子孫と戦って、魔法世界でラカンの弟子に
なってまた戦って、魔法世界の真実を知って、そして世界を賭けた
最終決戦を行うと言う未来を俺は知っている。

だけど、この未来はこの世界の未来じゃない。

「は？ ジャック？」

そんな事、考えたことも無かった。

「ちょっと触れただけでもこのザマか。俺様の気でさえ風船みたい
に消すなんざ、対したもんだぜ」

この時点で原作キャラが死ぬなんて思いもしなかった。

現実、そう甘くない。

それがソレのあり方（後書き）

始めの少女は一話目に出た神に無理やり転生されたという設定です。抗おうとしても、結局神の手の平で遊ばれて苦しんだようです。

『あれ』が話していた第三位と第四位は……わかる人にはわかる筈です。

『あれ』の強さはネギまでというと、大体初期の刹那並だと思います。戦闘方法は初見殺しですし、不死身性があるから死ににくいですし。あと1、2話ぐらいで序章を終えて新しい展開になれば良いなと思っております。

他の小説を書いた後すぐにまた書くつもりです。

……この時点でまだオリキャラに名前を付けてないってどうでしょうか……。

一つの世界の終わり

ここは紅き翼^{アラルツラ}の秘密基地。 連合からも帝国からも追われるハメになっちまって、何故か帝国の第三皇女も一緒に姿を暗ませる事になった。

「なんじゃ、これが噂の紅き翼の秘密基地か！ どんどころかと思えば……掘立小屋ではないか！」
「仕方ないと思いますか……」

今は派手に動けねえのにそんなに期待しないで欲しいもんだ。いつもは騒がしい紅き翼^{おれたち}だが、今はそんな気分にならなかった。暗く、どんよりとした空気が俺達を包んでいた。

……ジャック・ラカンが死んだ。
マクギル元老院議員との会合でハメられ、一戦交えた時、白髪の少年が地割れを作り、不思議な手を持つアイツを呑み込もうとした。だが、ジャックは閉じかけた地割れに腕を突っ込んでアイツを引き摺り出したのだ。

その際に、つかんだ腕が、異能を打ち消す右手だった。

魔法世界の真実は聞いていたから、俺はそれを見てギョツとした。

そしてジャックは……死んだ。
アイツはジャックが死んだのは俺の所為だと言って1人遠くにいる。

だからこそ、納得がいく。

「おい」

「……ナギか」

弱々しい姿に問い詰める決心が鈍りかけた。ただ、言わなきゃなんない事だ。

俺の神妙な面持ちに気付いて、体ごと俺のほうに向き合って、聞く体制になる。

胸の辺りが締め付けられる感覚に陥る。重い唇を動かして、言い放った。

「戦線から抜けてくれねえか？」

何を言われたか、わからなかった。

「………どういう意味だ？」

「そのままだよ」

「っ、仲間を消しまうほどの力を操れない奴は役立たずって事か!？」

敵味方関係無く打ち消す力なんて両者共に脅威である事はわかっている！ だけど、俺は皆の力になりたいんだ！

「そうじゃねえよ」

「? じゃあなんで」

「この前、奴に会った」

「奴」

俺と紅き翼が出会ったあの不気味生物の事。紅き翼はおれたちそう呼ぶ事にした。

ていうか奴に会ったのか!? 何時!?

「ま、首を残して粉々にしたんだけどな」
軽い口調で言い放つナギに少しおの慄いた。

「そんなときに聞いたんだ。お前を狙う理由と、この世界の事」

それを聞いて俺は思わずドキツとした。

そんな俺の心を見透かしたのだろう、ナギやっぱりかという表情をした。

「それを聞いてさ、なんとなく合点が言ったんだよ。お前に対する違和感がな」

ふうと息を吐き、

「この前の戦線で殺した奴らの顔を覚えているか?」

いきなり何を言ってるんだろうか?

今は戦争中だぞ? 殺した相手なんか一々覚えれるわけねえじゃんか。

「実を言うと俺もさっぱりだ」

胸を張って堂々と言える事じゃねえだろ!

「けど戦いの後思い出すんだ。死ぬ間際に俺を見て、殺してやるって、訴えかけてくるんだ。それで俺は人を殺したんだって実感する。だから、俺はあいつらの恨みの籠った顔を忘れないようにしてんだ」
「そんな事に何の意味があんだよ? この時代に情けは命取りになるんだぞ?」

俺の言葉にナギは押し黙り、少しして顔を上げた。

「情けねえけど、俺はあいつらの顔を忘れられないんだよ。あいつらにも戦う理由があるうが無かるうが、俺達が連合の為に戦ったように何かの為に命を奪った。だからその分、俺はあいつらの念つつつか、なんだろうな。まあ、そういうもんを背負おうとしてんだ」

俺は言葉が出なかった。

原作を見る限り、ナギは楽天家でバトルジャンキー戦闘狂で後先考えない奴だ。

俺はそう思ってた。

けど違った。

ナギはちゃんとこの世界の事も考えていたのか。

「奴からの情報で違和感がなんなのかわかった。お前は俺たちしか目に入っていないんだ。それ以外の人はただの人形としか見えてねえんじゃないのか？」

「それは違う！俺だって世界の為に戦ってたんだ！」

「今まで奴らを消してどう思った!？」

何とも思わなかった。

ナギに面向かって言えなくて、心の中でそう呟いた。

「じゃあ、ジャックを消して、どう思った」

ナギらしからぬ弱弱しい声で俺に問いかける。
もの凄く悲しかった。

ジャックを打ち消した時だけそう感じた。

「俺たちは始めは名を上げる為に戦争に加わった。けど今は戦争を止める為に動いてる。だから極力犠牲を出したくないんだ」

「俺の力はそのために邪魔ってことか？ …… 守る為の力を手に入れたってのに、なんて様だよ……」

「お師匠様が昔言ってた。『意思無き力は何も出来ない』って。お前からは人を救う『意思』が全く見れねえ。誰かを守る事も、誰かのために戦う事も出来やしない。その右手はこの世界じゃ、死体すら残さない、ただの兵器だ」

ナギはそう言った後、何も言わずに俺から離れていった。

……間違ってるのか？ 仲間を守るうとする事が。

俺はなんとなく右手を見てみた。
イマジンプレイカー

何の変哲も無いただの右手。この手で何人も人間を屠ってきた、この世界ではかなりチートであろう能力。

この手で人を殺した。

そう考えた瞬間、ドロリとした赤い液体が着いた手を幻視した。

オリンポス山に絶叫が木霊する。

俺たちは墓守り人の宮殿で完全なる世界との最終決戦で勝利を収

コスモエンテレケイア

めた。……犠牲は少なくなかったが……。

その後、オステイアが崩壊し、アリカは『災厄の女王』と言われ投獄された。

2年間も牢屋に入れられたアリカを思うと、頭の中がぐちゃぐちゃになって胸の下から溶岩が噴出すような感覚に陥った事もあった。

2年間待った甲斐があり、処刑直前にアリカを助ける事が出来た。アリカは処刑されたことになり、アリカは本当の意味で解放された。

……その間、あいつは俺たちに有益な情報を持ってくるだけで、あまり戦線に干渉しようとしなかった。……むしろ、その方が良か

ったかもしれない。

まっ、全てが終わってハッピーエンド、めでたしめでたし……、
と言う事にはならないようだ。

俺とアリカは絶賛新婚旅行中であり、魔法世界と旧世界を歩き
来していたり自由な時間を充実していた時だ。

突然大きな地響きが魔法世界を揺るがした。
オスティアが墮ちた時よりも被害が大きい事が連日まほネットで
知らされ、偉大なる魔法使い（マギステル・マギ）達が必死に食い
止めようと動いてるらしい。

俺たち紅き翼のメンバーもそこに加わった。

調査の結果、震源は墓守りの宮殿の奥部だった。当事者の俺たち
はかなり驚いた。

まさか完全なる世界の残党が何か起こそうとしてるのか……？
辺りを警戒して奥へ進むと、そこには

「なんだこれは……」

『それ』を見た全員がそう呟いた。

光り輝く異形。女性的な造形をしていて、鼻や口などの器官は表
面にすべすべした布を覆ったような感じだ。髪があるところには背
中にかけて金の刺繍が入ったラツパ状に広がる布を空くうにたなびかせ、
頭の上には輪が浮かんでいた。

歪いびつでありながら、魅せられる神々しさを兼ね備えるそれは、
ガブリエル
「神の力だっ！？」

誰かが叫んだ。俺たちはその声をよく知っている。

「ガブリエル……！ まさか旧約聖書の天使だと言うのですか！？」
アルがご丁寧に解説した途端動揺が走る。天使って架空のモンだ
る！？

アレコレ騒いでいた所為なのか動かなかった天使が動き出す。
手を広げると、背中から氷のような翼が生えてきた。その光景を
見た全員が息を呑み、魅せられる。

だが、すぐにそんな事を考えられなくなった。

ゴツツツ！！と音が消え去り、衝撃が体を貫く。

何が起こったかわからなかった。けど、辛うじて天使が何をした
のかを見る事ができた。

ただ、氷の翼を振っただけ。

ただそれだけで調査団を壊滅させた。紅き翼のメンバーと本当に
実力がある奴らまでも手負いの状態だ。

圧倒的な力の差。創造主とは格が違いすぎる。
ライフメーカー

俺は正直勝てないと思った。

この俺でさえ、だ。

また天使が動き出す。

それを見た時、遠い地で俺の事を待っているアリカの姿が見えた
気がした。

神聖な暴力が、俺達を襲う

「おらぁっ！！！！」

ガラスが割れたような音が聞えた。天使の攻撃の進行方向にアイツがいた。

ただし、右手首以外は傷が付いてない所は無状態。

「……何、やってんだよ……」

右手を伸ばしたままにも答えない。不意に自分のポケットをまさぐって辺りに薄いものを撒き散らした。一枚80万もする転移魔法符を辺りに撒き散らした。

「早くそれ使って逃げろ。怪我が浅い奴は意識の無い奴連れてって行けよ」

さも軽い感じで言い放つと、残った調査団の奴らは軽く礼を言い、さっさと逃げてしまった。

「ナギ達も早く行け。ここは俺が食い止める」

「あの天使に立ち向かうと？ 無茶を通り越して無謀です！ あなたの右手でも」

「刺し違えてでもアレを止めてやる」

それを聞いた瞬間俺達はまた息を呑んだ。アイツの目は戦場で何度も見てきた。

……説得しても無理な話だろう。

「わかった」

「ナギ!？」

「だけどな、これだけは約束しろ！ アレを倒して、ちゃんと生き

て帰って来い！ 約束破ったら絶対許さねえからな！！」

自分で言ったセリフに少し子供っぽかったかなと思いつつ、俺は転移魔法符を発動させた。

『ちゃんと生きて帰って来い』

ナギはそう言ってくれた。こんな、俺にも。

ナギのああいふ性格が周りを引きつけるんだろうか。

「……帰ったらみっちり話し合おうか」

詠春が少し怒った口調で言った。

「私は初めの頃の貴方を恐れていました。人を消滅させる事に疑問を感じない貴方を。ですが、今は戦う理由が出来たようですね。そこは評価しますよ」

アルビレオが珍しく厳格な顔をして、すぐにいつもの胡散臭い顔で言った。

「お前の事情なんざ知らんがな、皆の言ったことだけは守れよ」

ガトウがタバコの紫煙を吐いてハードボイルドっぽく言った。
ここにいるのは俺と天使カプリエルだけとなった。

「俺さ、主人公ヒーローに憧れてたんだ」

瓦礫と化した足場を踏み抜く。

「無償で誰かを助けて、時には敵ですら手をさし伸ばして、不屈の

心で立ち上がる、そんな奴にさ。でも思えばこの世界に来て、そんな事一度もやってなかったんだよな俺」

天使はまた翼を作って伸ばし、一気に襲い掛かった
圧倒的な力に、俺はただ走り出すだけ。右手に宿った力たったひとつだけのチカラを振るい上げる。

「最後までいい主人公らしい事やってもいいだろ？」

主人公ヒーローになる権利は誰にでもある。

.....
.....
.....

私の視点ですか。

この物語せかいも終わりを迎えるようだ。

あの異分子を自分の手で抹消する事は出来なかった。が、手間が省けたと言えるだろう。

この世界の結末を知りたいですか。

私に必要な事ではないので想像に任せます。

この世界の役目は終わりました。後は自壊し、他の世界で私が生まれるのを待ちましょう。

千の呪文サウザント・マスターの男と戦った時の敗因は何だったのか、アレだけが気になる。

私の心は無くなっているのだから、『気になる』という思考は無
いはずなのに。

完

一つの世界の終わり（後書き）

後書き

第一部が終わりました。

主人公は次の章から変わります

微妙だなあこの終わり方。

大戦の部分を読んできると、転生者って神の補強なのか、殺したって実感しないのが多い気がしました。大抵ゼクトとか仲間キャラが死んだりして死というものを感じ取ったりするし。

あと、ナギの戦争への想いとか描写されないのも多い気がするし、ただの戦闘狂いになっちゃったり……

僕を書くナギのセリフは極甘だと思う方もいるかもしれませんが、ご了承ください。

戦争中ではアヘンや覚せい剤が出回ったそうです。

兵士の気が狂わないようにする為だとか。

戦争中の魔法使いアンチとかでは、ナギ達が戦艦を沈めて喜んでとかいうのを指摘していますが、そういう事をしていないとあつという間に気が狂ってしまうと思います。

第二部は大きく変わって、魔帆良から始まる予定です。

主人公も複数になり、原作から大きく離れます。

しばらく他の小説を更新した後、またこの小説を書きますので、楽しみに思ってくれる方は楽しみに待ってくれたら嬉しい限りです。

ブログ その一（前書き）

固有名詞が一切出て来ない……

読みにくかったらすいません

プロローグ その一

「何でオレが殺されるんだッ?! オレはこの世界を救ったんだぞ
お……!」

異分子は私に対して呪詛めいた事を言っただけで消えていく。
そんな事私に言った所で何だと言う。

功績を残した所で私から逃れる理由にはならない。人間の喩えで
言つと、野犬の群れのリーダーが熊に襲われ死んだ、という感じだ。
襲った熊は残りの群れから反撃されるが、熊が襲って殺したリーダ
ー犬を助ける理由にはならない。

「……」

思考を張り巡らせる事はこれまで無かったはず。……バグでも発
生したのだろうか。

「この物語も終わる……私の存在価値も、もはや無い。
せよ」
自壊

呟くとボロボロとあらゆる物質で構成された身体が崩れてゆく。
足から、手の先から、皮膚の表面から。

……彼が救った世界の住民が本当に救われたのか、私にとっては
どうでもいい事だ。

システムオールグリーン。性能^{スペック}前回比3%減少。起動開始。

また出たのですか。まあ、これも異分子の抹消のため。

……また性能スペックに不備が出たらしいが、問題無い……と思う。時間がかかるだけだ。

……この世界は……。

人工物はほとんど形を成しておらず、かと言って自然豊かなわけではない。人は住んでいるようだが、かなり少数である。

詰まる所、この世界の終わりは近い。

たまに世界が交差する現象が起こる事がある。異分子達はそれを『クロスオーバー』とか『コラボ』とか言っていた。しかし、もし全ての世界が交差してしまったら。パワーバランスは一気に崩れ、様々な経緯、原因で世界は崩壊する。

そして、ここはその世界の成れの果て。

この世界に来る事は予想不可能。好き好んでこの世界に来る者などいない。

「異分子は抹消する……」

そう。私が開発された世界じかんであっても、私は使命を全うするのみ……。

「アハハハハハハっ！ この体最高！」

とある研究所ラボの屋上に二つの人影があった。

片方はぐったりと地面に横になり、もう片方はその手を紅く染めてただただ嗤っていた。

「まさか憑依なんて思わなかったわあ。ま、設定を無理言ったアタシもアタシだけ……。でも、誰の身体なのかしら……。あら？」

嬉々として自問自答を繰り返していた『それ』は突然口を閉じる。刹那、魔力の奔流と空気を裂く轟音が『それ』を貫いた。

「……チートボディね、コレ。人間やめてるじゃない」

ビデオの逆再生のように身体が修復する『それ』。自身を攻撃の喰らう前の状態に巻き戻したようだ。

何処からか、舌打ちをする音が聞えた。恐らく狙撃手だろう。

最も、『それ』は狙撃手の正体を知っていたようだ。

気だるげに狙撃ポイントの方向を向くと、また狙撃され、爆破され、身体が粉々にされ、修復する。

その繰り返し。

風を切る音が鬱陶しくて、敵の正確な位置を見つけられないのが鬱陶しくて、自分の壊れる時の痛みが鬱陶しくて、身体を修復する面倒くさが鬱陶しくて、

「……………もしかして、時空とかも操れるのかしら？」

『それ』の顔が歪んだように嗤う。

次の瞬間、ベキベキベキベキイイ！と。

空間が悲鳴を上げ、一気に押し潰される。

そして、

時間は遡り、

研究所の屋上から数キロ離れた廃ビルの一室に狙撃手はいた。

色が落ちたような白髪に褐色の肌を持ち、紅い外套纏う大柄な日本人男性。

彼は抑止の守護者カウンター・ガーディアンと呼ばれる存在だ。

霊長の抑止力アラヤからの指示で人間が起こしてしまった事に対する後始末を行い、事件の原因となる人間、事件に関係する人間を皆殺しにし、結果として、その何十倍、何百倍という人々を救う存在。

今回も霊長の抑止力アラヤの理不尽な指示でこの世界へ召喚されたわけだが、

『……ここは、』

守護者には時間の概念は存在しない為、様々な時代に召喚される。だが、ここまで荒廃した時代はあったか？ と。

考えるのは後にして、まずは自分がやらなければならない事を優先せねば。

頭を切り替え、いつも通りに前へ進んだ。

どういう形であろうとも、絶対に人々を救ってみせる。

何故なら、彼の身は『正義の味方』なのだから。

ターゲット
標的を確認した守護者は自身の得意とする魔術を使い、黒塗りの洋弓と捻れた剣を投影した。

捻れた剣の名は、偽・螺旋剣カラドホルグ。ケルト神話に出てくる硬い刃を意味する魔剣だ。

洋弓に偽・螺旋剣カラドホルグを番え、引き絞り、狙いを定める。ターゲット

標的への直撃コースは万全。いつでも放てる。

そして、放った。

ゴオオオオオオオオオオ！！ と凄まじい轟音が静寂な世界に響き、空間を切り裂く。

「壊れた幻想」
フロークン・ファンタズム

数キロ離れた地点で爆発音が炸裂した。

爆発地点から離れたここまでにも爆風が流れ、風は守護者の頬を撫でた。もうもうと標的ターゲットのいる辺りに砂煙が立ち込める。

構わずに数本の矢を立て続けに放ち、『壊れた幻想フロークン・ファンタズム』を発動する。徹底的に殲滅するべく放った矢は確かに敵を貫き、四肢を破壊した。

なのに、自身の第六感と呼ばれるものが『まだだ！』と言って止まないのだ。

(随分と厄介めんどくさいな仕事を回してくれたものだ、霊長の抑止力アラヤめ)

内心、悪態つきながらも矢を放つ手を休めない。

ふと、砂煙の切れ間から標的ターゲットの顔が垣間見れた。それはとても歪んだ表情を浮かべていて、守護者の彼でさえ背筋が凍る表情ものだった。

(マズイっ！)

長年の勘が告げる。今すぐここから離れると。

直後、ベキキィ！ と空間が軋む音がすぐ近くから聞えた。

彼は廃ビルから飛び降り、自分の着地点に向けて数本の矢を放つ。さらに『壊れた幻想フロークン・ファンタズム』で矢を爆発させ、地面に穴を空け、その穴に飛び込んだ。

本当にギリギリだったらしい。

音にならないほど大きな音が彼の耳を貫き、どんな現象が起こったのか、身体を引っ張られる感覚がした。

しばらくすると、身体に五つ備わった感覚がはつきりしてきて何

となく立ち上がったみた。

研究所は消え失せ、綺麗さを感じるほど何もない荒野に変わっていて、廃ビルは半分以上えぐられ、さっきの正体不明の攻撃の凄まじさを物語っている。

守護者は白と黒の陰陽剣を投影し、一層気を引き締めた。そう。

綺麗さを感じるほど何もないのだ。

死体か残骸すらも残っていない。だとすれば、答えは自ずと出てくる。

「見いつけたあ」

耳元で楽しげな声が聞えた瞬間、振り向き様に剣を振るった。バキィ、と手応えのある感触を感じた。が、コンマ一秒で自身にも重い衝撃を喰らった。

「っ、フッ！」

受身を使って態勢を立て直し、陰陽剣の片方を標的に投げつけた。そこにはすでに標的はおらず、

「遅い遅い」

時間を少しだけ止めて、守護者の懐に入り込み、拳を突き立てる。守護者もただやられるわけじゃなく、身体を半歩逸らして掠るように攻撃をかわした。

守護者のもう一つのトラップにも気付いていない様だ。

陰陽剣の片割れで標的の魔手をいなし、こちらから叩き込む。当然、掠りもしない攻撃だが、

ザッ！

何かが、ターゲット標的の背に突き刺さった。

守護者の剣の名は干将かんしょうと莫耶ばくやと言っ。

その特性は互いを惹きつけ合う力。

投げられた干将かんしょうが手に持つ莫耶ばくやに惹きつけられるのは当然だ。

トレス・オン
「投影開始！」

呆気のとられた隙だらけのターゲット標的の喉元に莫耶を突き刺し、さらに

同じ物品を十数本ほど投影し詠唱を行う。

ブローケン・ファンタズム
「壊れた幻想！」

光と衝撃が二人を襲った。

「……やったか？」

爆風で吹き飛ばされた守護者は満身創痍の身体を半身だけ軽く起こしてそう呟いた。

さすがにアレを喰らって立ち上がるのなら、真正正銘のバケモんだ。

ともあれ、世界からの仕事は終わった。

後は世界が回収に来るのを待つだけだと力を抜く。

いきなり視界が暗転し、最後に聞いたのは少女っぽい嗟い声だった。

力なく地に平伏す守護者。

抑止の守護者である彼でさえ『それ』
カウンター・ガーディアン
『彼女』の特異性に
敵わなかった。

と、言うもののまだ殺してはいない。
靈長の抑止力の助力でなかなか死ににくいから。
「ここがFateの世界なら、また送られてくるかもしれない……。
そうだ」

『彼女』のもう一つの特性を発動する。
対象の歴史を分析し、時間を巻き戻し、起こった歴史を消す。
つまり歴史を消す。

彼のかつての歴史。守護者になった後の歴史。面白くなりそうだから、一般常識と魔術と守護者についての知識だけは残しておいた。

「適当にどっかの平行世界に飛ばすつても面白いかもね」

邪気がたつぷりな笑顔で言い放つ姿はとも見るに耐えないものだ。

何も無い空間に手を翳し、何も無い所に黒い渦を発生させた。
渦ができたのを確認した『彼女』は無造作に守護者の頭を掴み、

「じゃあね」

無邪気な笑みを浮かべたまま、渦に放り投げた。

一仕事終えた表情をした『彼女』は 急に顔を強張らせる。

「ホント……転生初日からイベントいっぱいね！」

それは一瞬の出来事。

『彼女』の姿がぶれて、二つの影が交差する。

「まさか自分を抹消するとは……」

「はあ？ コレあなたの身体？ ゴメンナサイねえ貰っちゃって」

感情の無い声と馬鹿にしあざ笑う声。

どちらも同じトーンの声なのに全く別人な印象を受ける。

「で？ あなたはアタシをどうしたいわけ？」

「異分子は抹消せよ」

「……ダーレクのモノマネ？」

何となく平行線な話し合いだ。

それでも、双方次に行く行動ははっきりしている。

それは、

「悪いけどさあ、さっさと消えて！」

「抹消せよ」

姿がぶれて、何処からかぶつかり合う音がする。

片方は魔手で。片方は時計の針で。

手を突き出せば時計針を突き返し、時計針を振るい身体を壊せば
すぐさま修復する。

どちらとも力の大差は無い。

同じ個体であるし、互いに同じ特性を持っているからだ。

「アンタ、アタシみたいな転生者を狩ってるみたいね」

「……」

恐らく、『彼』の歴史を覗き見たのだろう。

「転生者が活躍して良い気分になった所にいきなりしゃしゃり出てさ、殺してその後歴史を消してなかった事にして、それだけで良いと思ってるの？ 元々私たちは転生者を狩って、この世界を変える為に作られたみただけ、そんな理由だけで人間を狩って良いと訳が無い！ 歴史が抜けたらパラドクスとか起きて、世界にどんな影響が起こるか分からない。歴史を簡単に改竄して言い訳が無い！ そんなアンタを誰も求めない！」

「……ご都合主義……」
「……エクス・デウス・マキナ……」
手と針を交わしてる最中に、そう問われた。
何を思うのか、『彼』は何も言わない。

一秒間の抗争に終わりが見えてきた。

『彼女』は時計針を振るう『彼』の腕を掴み取り、そのまま引き抜く。ブチブチブチイ！ と筋肉が干切れる嫌な音を立てる。対して『彼』は片腕になりながらも時計針で『彼女』の腹部を貫通する。それでも『彼女』は修復してしまうが。

「……千日手って奴？ これじゃあ決着つかないわ
「いえ」

互いに距離を取る。

ふと、『彼』の手に見慣れない物体を掴んでいた。

「これで終幕になります」

不可思議な文様が描かれた円盤状のもの。

『彼女』にはそれがとても危ういものに見えた。

「私たちは完全じゃない。粉々にされても、完全に修復されるにはキチンとした機関が必要。そのための核を貴方から引き摺り出した」

つう、と『彼女』の頬に冷や汗が伝う。

「核が無ければ貴方も私も存在出来ない。それは知らなかったようですね」

「！ やめな　　！」

『彼女』の制止を聞かず、宙に放った核に時計針を突き立てた。ピシピシッ！ と亀裂が入り、とてつもない情報が頭に入り込んでくる。

亀裂が入った途端、『彼女』は言葉にならない絶叫をし、胸を押さえて倒れる。

「　　貴方の言い分に訂正を求める」

唐突に『彼』が語りだす。

『彼女』は苦悶の表情で『彼』を睨みつける。

「私は理由があつて異分子を抹消してるわけではありません。単にネズミのように増えるから抹消しているだけです」

ただ自然の摂理に従い獣のように殺しているだけだ、と。

善も悪も無くめちやくちやくに異分子を抹消する機械なのだ、と。

『彼女』は『彼』言い分のにやり場の無い恐怖に駆られた。

「いや……死にたくない！　せつかく生き返れたのに、退屈な地獄から抜けたと思つたのに！　何もしてないのに何で殺されるのよ！　ねえ！　無かつた事にして！　核コアを元に戻してよ！　アタシは　　っ！」

泣き喚き、鼻水やヨダレでくしゃくしゃになった顔で懇願する姿を無感情の瞳で見つめる『彼』は、オブラートに包んだ言い回しも無く残酷な一言を言い放つ。

「手遅れです」

「お願い……助けてよお……」

その言葉を最後に『彼女』の第二の人生は幕を下ろした。残った『彼』は事務的に壊れ始める。もうこの世界で行う事が無くなったから。

何となく崩壊しかけた世界をバックに『彼女』の言葉について思いを寄せた。

「ご都合主義、エクス・デウス・マキナ、機械仕掛けの神」

自分を表わす言葉に合ってる。

自嘲なのかはよくわからないが、何となくそう考えた。

気が付けば見知らぬ場所にいた。

自然豊かで大気中にマナが溢れている。

ここはどこだ？ 何故俺はここにいます？

『おい、ミステリー？ そっちに何かあったか？』

『ダメダメ、何にも無いわよ』

……ちょうど良い所に人がいたものだ。ここは素直に訊ねてみるか？

声の方向へ歩を進めると、赤毛の青年と、青年と同じくらいの年の少し赤みがかかった銀髪の少女がいた。何かを探してるように辺りに配っていた視線が俺に定まった。少女の方は、何故か俺を見て目を見開いてるが。

「少し良いか？」

「誰だお前？」

「コラナギ！ 初対面の人に失礼でしょうがっ！」

「ったあ！ 何すんだコンニャロー！」

ポカリ！ とコミカルな音で青年に拳骨を喰らわせる少女。青年は文句を言っつて少女を小突き返した。

ポカスカポカスカポカスカ！ やけにコミカルな喧嘩が目の前で始まった。

……恐らく俺の事はさっぱり忘れ去られているのだろう。

軽く咳払いをすると、目の前の青年と少女はハッ、として照れくさそうに俺に向き直した。

「すまないが、ここが何所か教えてくれないかね？」

「なんだ迷子かよ『バキツ！』てえ！？ なにすんだよ！？」

「ナギ、殴るわよ」

「もう殴ってるだろうが！」

……また言い合いになってきた。あれか？ バカカップル的なあれなのか？

もう正直付き合いきれなくなって、思わずジITTERとした目をしてしまった。

「……んんつ。ここはオリュンポス山の端よ。地理的に言ったらタ
ンタロスの北ね」

咳払いをして誤魔化し、何事も無かったように淡々と説明する少
女。

……しかし、タンタロスと言う地名など聞いた事もないが……。

「……聞いた事無いの？」

「あつちの世界から来たんじゃないかねえのか？ だつたら地理に疎いの
は頷けるし」

「うん。ゲート魔法の失敗で来ちゃったなら、まあ……」

彼らの言っていることがさっぱりわからない。

ゲート魔法？ あつちの世界？

「え？ 何？ 何もわからないの？」

「……すまない。俺にも何がなんだか……」

「はあ……ミステリーのトラブル体質の所為だなこりゃ。あんたの
名前は？」

待てそこの赤毛。俺がさらにトラブルを起こすような言い方は止
めろ。

ぶつくさ文句言ってる青年に悪態つけながら、言われた通り名乗
る事に……？

俺の名は、何だ？

「……とっても嫌な予感が！？」

よくよく考えれば何も思い出せない。

んけん、だよな？

「何はともあれ！ アンタが何者でも何か問題抱えてもさ、私たちは一向に構わないわよ？」

少女はそう言うのと俺に向けて微笑みかける。

それは軟らかく、とても優しくかった。

『守護者の知識』を持つ俺には、それがとてつもなく眩しい。

「……だから言ってるでしょ。アンタが問題抱えても、一向に構わないって」

「しかしだな」

「しかしも案山^{カカシ}子も無い！」

彼女は俺の腕を掴み、ぐいつ、と引き寄せる。

「アンタが幸せになっちゃいけないって誰が決めた？ アンタが不幸になっても誰も喜ばないわよ」

彼女の言葉は妙に説得力がある。

どう表現すればいいのか、俺の心の壁に輝が入り、どんどんと広がっていくような。

……それにしても、

「立場は反対ではないか？」

彼女の顔が鼻先まで迫っていて、さらに俺は彼女の腕に収まった姿勢だ。

劇でヒーローがヒロインによく行う体勢だが、これでは彼女がヒ

「ローで俺がヒロインみたいだ。
彼女にイタズラ心を添えてその事を伝えたと、顔を赤らめ、次の
反応を得られた。」

「なっ！　ちよ、調子に乗ってんじゃないわよ！」

殴られかけた。下半身のとある場所を。

その後、彼女と赤毛の青年の仲間達に紹介され、しばらくの間彼
らの所に厄介になった。

……ただ、あの少女の俺を見る目がとても気になった。

プロローグ その一（後書き）

いきなりですが、

オリキャラ募集したいと思います。

単に他の方の小説を読んで感化されてやってみたいなあ、と。

新章について

基本原作通りに進める気ですが、かなり歪曲させるつもりです。

主人公が3人ほど居たり、他作品のキャラだったり、性別変わったやつたり、とにかく作者の趣味が入ってます。

それでも良い、という方は今後もよろしくお願いします

プロローグ その二

イギリス、ウェールズの小さな村。

この世界ではここで主要人物レギュラーが生まれてくる事になる場所だ。

茜色の空が綺麗に感じるこの時刻。

薄暗い森を数人の男女が、それはもう必死な表情で突っ走っていた。

理由は、彼らの背後にある、一つの影だ。

ただだばな服装に伏せ目気味で不機嫌に見える人型の何か。手に彼らを抹消するための時計針を持っている。

追跡者チェイサーは一人。

彼らはある程度の力を持つ実力者。彼らが一致団結すればどうってことは無いはずだが……。

「ああ、もう！ これじゃ埒があかねえ！」

追いかけていた一人がそう叫び、追跡者に向かって武器を手に駆けた。その手に持つのは、炎を纏う『モノブロスサイズ改』という鎌状の太刀。

今まで追い回された鬱憤を晴らすため、追跡者の首にモノブロスサイズ改をかけた。

しかし無表情な追跡者は彼の攻撃の合間を縫って時計針で斬りつける。勢い良く飛び出した彼の体は一瞬にして腐敗し、分解され、骨に変わり、追跡者の後方に飛び散り、風化して、跡形も無く消え去った。

その様子を見ていた残りの男女が悲鳴を上げる。

「クソ……無茶しやがって……！」

「ネタやってる場合じゃねえだろ!？」

「けど、あいつに言うとおりの。このまま追い回されてもこっちが消耗するだけ」

「アレはいくら壊しても直るんだぞ!? あんなのに勝てんのかよ!？」

「大丈夫だ。見てるとアレの回復力はだんだんと弱くなってる」

数人の男女は話し合い、結論を出す。

回復力が追いつかないほどの攻撃で、破壊ではなく消滅させようと。

最初に飛び出した少年に続いて金髪の少年が光線を放った。

光は木々をなぎ払い、追跡者を貫く。

仰け反りはしたが、それだけですぐに修復し、また歩み始める。

今度は薄い金髪の少女がその小さな手にフィットするナイフを手に向かつていく。

追跡者は三本の時計針を投げた。三本一对の針は三方向から少女を襲う。

少女はナイフ反して逆手で持ち、三本の針を綺麗に切り裂いた。

「どう? これが『直死の魔がつ!?』」

得意げに名乗ったのが仇となった。

ずんずんと突き進む追跡者は、そんな戯言を無視して彼女の首根っこを掴んで地面に押し付け、新たに針を出して少女を地面に縫い付けた。

これで歴史に残らぬ死人が二つ。

「ナニ！ 『石化の魔眼』 よろしく！」

「OK！」

「俺も手伝う」

最後に言い出した少年は、虚空から大型の銃器をだし、追跡者に狙いを定め、撃った。

火薬が爆発する音が凄まじく、そこにいる全員が耳を塞いだ。飛び出たロケット弾は追跡者が軽く避けてその後ろで爆発した。

後ろが凄まじい事になっても振り向かないで突き進む追跡者。すると、急に足が重くなるのに気付く。いや、身体全体が油が切れた機械のように動きにくくなっている。

銃を撃った少年より半歩前に出た少女の『眼』の所為らしい。

追跡者が目標を少年から少女に変えた時、

「ちょっといいか？」

すぐ近くで声が聞えたので、魔眼の所為でキレ悪く顔を向ける。

紅く鳥が飛び立つような模様の瞳が追跡者の目に入った。

「一生私に仕えろ」

それは、絶対遵守の瞳。

抗う事など出来はしない。

その絶対的な命令をされた追跡者はダランと腕を降ろして身じろぎ一つしなくなった。

「……上手く、行つたみたいだな」

恐る恐るといった感じで肩を降ろす。

他の皆も同じ様子でこちらを窺ってる。

「無理に壊す必要も無かったな。これで私達に最強の武器が手に入ったわけだ」

ははは、と疲れた雰囲気ですら笑った瞬間、身じろぎ一つしなかった追跡者が動き出し、魔眼の持ち主を時計針で切り裂いた。

「なん、で……」

「貴方が命じたのは一生。時間を登り、貴方の一生分の時間が過ぎただけの事」

「ルキイイイイイイイ！」

弱弱しい問いに事務的に答える追跡者。

自分達を殺すのが当たり前としか思っていない追跡者にここにいる全員が憤慨を感じた。それ以外の理由で憤りを感じて殴りかかるのが一人。

「ルキを、よくもルキをッ！」

伏せ目の追跡者は表情を変えずに少女を突き刺した。

力無く倒れ、風化した少女の骸は、ちょうどルキと呼ばれた少年の真上に重なるように落ちて消えていった。

「ギアスも効かない……あれ？ これって死亡フラグ？」

「君はよくふざけていられるな」

「……正直こうでもしないと気が狂いそうなんだ。……アイツはどうした？」

最初に攻撃をした少年が銃器を扱っていた少年の姿が無いのに気付いた。

追跡者と距離を取りながら光を操る力を応用して辺りを探ると、見つけた。

光学迷彩スーツをまとって自分達の反対方向に走ってる少年を。

光を操る彼にとって、光を屈折して姿を消す人間を見つけ出す事など造作でもない事。

「アノヤロウ……、裏切りやがった……！」

沸々と湧き上がる怒りを手の平に込め、投擲する。

光の槍は真つ直ぐと一見何も無い場所に向かい、次の瞬間に、ドサツと言う音が鳴った。

「アリス、俺が囷になる。お前にあいつを託す」

「！何を言っている！？ 正気か!？」

「でも、このまま全滅じゃあいつは原作と同じ運命を辿るし、自称正義の魔法使い共の駒になりかねない！」

「っ」

少女は何も言わずに瞬動で少年から離れて

行けなかった。

いや、行かなかった。

金物が擦れぶつかり合う音がして、気付けば少年は追跡者共々頑丈そうな鎖に縛られていた。

少年は少女を睨みつける。

しかし、少女の瞳は激しく揺れていた。

「そうだ、始めからこうするんだった。いくら不死身でも次

元もとの間に放り込まれば消滅するはずそう、そうだ！」

「お前、何言って」

彼女から矢継ぎ早に出される単語が理解できない。

「異常すぎる魔力量があれば、世界に穴を開けるには申し分ない」

「お前も裏切るのかあ　っ！　アリスウ　！」

「大丈夫だ。あいつはちゃんと守る。だから人柱となってくれ」

少女は何かしらの言葉を使った呪文を唱えると、追跡者と一緒に縛られた少年の身体が光りだす。

そして、少女は仮にも兄妹である兄と共に追跡者を葬り去るはずだった。

「何で……何で……？」

震える声で絞り出た言葉はそんなものだった。

彼女が少し考えれば思いつく事だが、追跡者は異世界を渡って、彼女達のように死んで理ことわりを反して生き返った存在、いわゆる転生者を抹消している。ならば、時空間に葬られたところで、すぐに戻ってこれるのは当たり前と言えるか。

「　　ちよ、ちよつと待つて！　少し話し合わないか……？　何故、君は転生者を殺す！？　原作を壊さない為か？　それともアンチか？　私はそんなチンケな輩とは違う！　私はこの世界で私の人生を生きるつもりだ！　少なくとも、君に殺される道理はな　」

彼女はそれ以上言葉を続けられなかった。

首と胸が離れてしまったら当たり前だろう。

ドサリっ、と鈍い音が響き、立っている者は追跡者のみ。追跡者

はぼつりと口走った。

「増えたから減るだけの事」

追跡者の無常な言葉は風に流れて消えて行った。

「アリス・スプリングフィールド、ナミ・スプリングフィールド、ルキ・スプリングフィールド、マリカ・スプリングフィールド、ムギ・スプリングフィールド、カギ・スプリングフィールド、マリン・ポルガ、以上抹消完了」

確認を取るように事務的に言葉を並べる。

転生者をあらかじめ抹消し終わった追跡者。

その行動に不備は無い。

「お兄ちゃん？ お姉ちゃん？」

誤算があったとすれば、赤毛の目撃者がいたということ。

歴史を消すと、歴史を消した対象が行ってきたままでの事、全てがその世界からすっぱり抜け落ちる。

しかし歴史が消える瞬間、その世界の住民に目撃されてしまうと、消した歴史はその住民の記憶にとどまる。

「……」
「……」

見詰め合う赤毛の子供と伏せ目気味の追跡者。

赤毛の子供は先ほどの光景に身震いして、ペタリ、と尻餅をつく。

「お、にい、ちゃん……。おねえ、ちゃん……」

目尻に水滴が溜まり始め、ついには声を上げて泣き出した。

「お兄ちゃん達を何処に隠したの!? 返してよお!!!」

基本的に異分子以外の生物にはあつちから関わらない限り手を出さないが、このままこの子供が異分子の記憶を保有したら不便だろう。と勝手に判断した。

無言で針を向けると、ヒッ！と年相応の情けない声を上げた。恐らく針で異分子を抹消した場面を見たが故に、今度は自分に同じ事が起こると思っっているのだろう。

歴史の改竄の過程で、最悪、異分子の記録ごと記憶が全て消えるかもしれないが。

子供の歴史を抽出、異分子と共に過ごした時間を抽出

不意に、針を持つ手を第三者に掴まれた。

「君は何者だい？」

白い髪をした無表情の少年。追跡者よりも頭一個分大きい彼は、無表情ながら警戒心と殺気を孕んだ視線を送る。

この時点で子供は緊張の糸が切れたようでふらりと地面に横たわった。

「何故邪魔する。即刻退場を要求する」

「それは飲めない要求だ。それよりも僕の質問に答えてくれないか

？ 君は、何者だい？」

白髪の少年の言葉に強みが増す。

双方譲る気は無い。

追跡者は無理やり白髪の少年の手を振り払い、もう片方の手に時計針を持ってきて少年に突き刺す。

白髪の少年は難なく針をかわす。

「貴方には理解しがた存在です。言った所で意味を成さない」

「そうかい。君の最初の質問の答えだけど、これは僕の単なる趣味だよ」

人形と人形。

二人はある意味同じだ。

だからこそ、自分の行動を曲げる事は決してない。

ぼくはまどろみの中にいた。

その中でぼくは思った。

さっきのは嘘で、今が本当だったら、と。

ここは苦しみ悲しみも無い。ずっとこのままでいたい。

ふと、今じゃ感じる事が出来ないはず暖かさを感じた。

何故ならその温もりを与えてくれる人たちは『』のだから。

意識をもっちゃダメだ。目を覚ましちゃダメだ。現実を戻っちゃダメだ。

『嘘』が『本当』になってしまう！

うつすらと目蓋を開くと、やっぱり知らない人に抱かれている。
白髪の表情が硬そうな男の人。

何処か、寂しそうに見えるのは気のせいなのだろうか？

じいっと男の人を見ていると、ぼくの視線に気がついたみたいで、

「起きたかい？」

無表情で訊ねられたから怒ってるみたいに見える。

何も言わないでコクンと首を縦に振った。

「…………お兄ちゃん達は…………？」

自然と口が動いて聞いていた。

嫌だ。聞きたくない。耳を閉じたい。お兄ちゃん達は村で皆と一緒に魔法の練習をして、お姉ちゃん達はネカネお姉ちゃんと料理の練習をしてるはずなんだ。

「君の友人と兄弟達は、残念だけど」

それを聞いた瞬間、胸からなんとも言えないものが上がってくる。
包み隠さず言った白髪の男の人を恨めしく睨む。何で言った？
ぼくは知らない方が良かった。

「君が聞いてきたからね」

素っ気無く言う白髪の男の人。

けど、白髪の男の人は、無表情だけど、急に暗い雰囲気をして、

「…………あの人たちは、君の大切な人たちだった？」

『あの人たち』はきつとお兄ちゃん達の事だろう。

「……うん」

「……なら君に謝るよ」

「え？」

何を言われたのかわからなかった。

どうしてあなたが謝るの？ 悪い事をしてないのに。

「あの人たちは皆君の大切な人たちだったんだろう？ 僕は彼らをずっと監視していて、彼らが襲われてる時も手を出さなかった。…僕は君の大切な人たち殺されそうになっても見捨てようとしたんだ。悪い事をしてないって君は言ったけど、僕は極悪人だ。誰も守っていない」

「……」

ぼくは白髪の男の人の話に何も言えなかった。

所々どういう意味がよくわからない言葉があったけど、白髪の男の人は後悔してるのかな？

後、白髪の男の人は誰も守っていないなんて、嘘だ。ちゃんと守ってくれた。

だから、これだけは言いたかった。

「ありがとう」

「……」

それからの事はよく覚えてない。

気付いたら村のベンチで眠っていて、アーニヤとネカネお姉ちゃんやスタンお爺ちゃんに怒られた。

後、村の皆はお兄ちゃん達の事をまったく覚えていなかった。アリスお姉ちゃんもカギお兄ちゃんも、あの怖い人が隠した人は皆忘れられていて、ぼくは一人で泣いた。

ぼくだけがこことは違う所に居たみたいで悲しかった。

ぼくを助けてくれたあの人の事はわからない。

名前も知らない悲しそうな顔をするあの人。

村の皆が話す会ったことの無いお父さんみたいなあの人。

「いつか、いつか、あの人^がぼくを助けたみたいに、ぼくもたくさんの人を助けたい！」

ネギ・スプリングフィールド、2歳。

たくさんの大切な人を亡くし、目標とする人を見つけた。

プロローグ その二（後書き）

子ネギの、幼児の喋り方がわからぬ。
というか難しすぎる。

いつものアイツは、話が進むに連れてチートと化してきましたね。
でもしばらく出番は無いです。
白髪のある人に永久石化喰らって森の中で固まっています。

あと、ネギま小説でネギの兄弟を主人公、オリキャラにしている小説家の方々へ

今回消滅させたネギの兄弟の名前が似ている、もしくは同じという
方々にお詫びします。
ナギかアリカの名前に似た名前を考えて、頭に浮かんだ単語を適当
にぶち込んだ結果です。
本当に申しわけありませんでした。

プロローグ その三(前書き)

閲覧者の皆様、3ヶ月ぶりです

今回の話でプロローグは終わりです。たぶん。

楽しく読んでいただければ僕としては嬉しいです

プロローグ その三

『 ツ 』

……誰かが何か叫んでる。

俺は何処から声があるのか見回そうとするが、何故か視点が動かない。

視点は白い服を着た……女性形の異様なものに定まってる。

それは全身を白のシャツで包まれているようで、金色の葉脈が所々に走っている。目とか鼻という人間らしい器官は無く全て凹凸のみ、髪はシャツを後ろに流して表現している。

『 …! 』

ズズン!! と轟音を耳に捕らえる。

下を見れば青白い海が瓦礫の間から垣間見える。

どうやら今、自分のいる場所は重力に従って落下してる最中らしい。

『 …! 』

目の前の異形は瓦礫にぶつかり潰されながらもなお、己の強さを象徴するような氷の翼を俺に伸ばして来る!

すると、俺の意志に関係無く、手が伸ばされガラスの割れるような音を響かせて防いだ。

この時に俺は他人の視野を介してこの光景を見ていることに気付く。

この光景を見ているのが誰かはわからない。目の前の異形は一体なんなのかわからない。この光景自体一体なんなのかわからない。

だけど、これは異常だ。

『！』

俺じゃない誰かが腕を振り上げて、目の前の異形に特攻を仕掛け
！

「うあああああああああ！！」

布団から飛び起きた俺は、肩で息をして、額に脂汗をびっしょりとかいていた。

「はぁー、はぁー、……ふうー」

自力で息を落ち着ける事が出来た。この手の夢に慣れているから。すると、壁からドンツ！ という音が鳴った。……今は真夜中だったからな。近所迷惑にもほどがある。

「……はぁ……」

またやり場の無いやるせなさが口から漏れる。

いつ頃からこういう夢を見るようになったのだろうか？ 少なくともあんなトラウマになるような出来事は俺の人生において一度も無い。

この夢に出てくる人間は、姿は俺に似ている事もあり、気になら
ないと言えば嘘になる。

それに、あの声は

「…………寝よ」

俺の咳きは真夜中の寮の片隅の部屋に寂しく響くだけだった。

『 …… つて、8時27分っ!？ ふ、不幸だあああああああああああああ……!! ……!! ……!!』

「…………また叫んでるわね、あいつ」

「こつから男子寮つて、結構距離あるはずなんやけどなあ。えらい肺活量や」

広い教室で机に突っ伏しているのが一人。

無論、俺だ。

あの後、担任の小萌先生に遅刻の説教され、朝飯を食べる暇も無く更に弁当忘れて二食抜いて力も出ず、委員長にだらしないそれだから単位も足りないのだ貴様は、と精神的攻撃を喰らい、悪友二人からは『小萌先生を独占しやがってー』と訳のわからない肅清を喰らい、一人の女生徒から『ここでも、影が薄い。だから。君に八つ当たり』と訳のわからない瘴気を出して俺に迫ってきて、

「…………俺、何かやったかなあ…………?」

「そんな不運に悩む貴方に一言！…………カミヤん、諦めろ」

「絶対悩む貴方にかけてる言葉じゃねえだろ!? 救い様が無いのか俺!」

さも楽しそうにカラカラと笑った後に、シリアスな雰囲気と言う金髪グラサンの悪友その一にツッコミを入れずにいられない。

すると、俺の隣にいる青い髪色の長身な悪友その二が世界三大テノールもびっくりな声をかける。

「そんな事ゆーても仕方ないやん? 不幸ふしをなくせーって言った所、結局カミヤん自体が不幸の塊やし」

「まずはふこーふこー叫ぶのをやめなさい」

委員長も話に加わってきた。

因みに彼女の必殺技は広いオデコをフルに使った頭突き、『吹寄オデコDX』

「……擁護の仕様が無い」

最後の砦と思ってた艶やかな黒髪の女生徒からもそう言われた。不幸だ……。

「……って、何故に皆様ここに集まっているんでせう?」

「おおー、復活早いなあ。まっ、いつもの事やからな」

「さっすが、不運にまみれてるだけあるにや〜」

「うるせえよ! だから俺の問いに答えやがれ!」

本気で落ち込んでるってのに、なんなんですかこの人達は! 冷やかに来たのか!?

「何って、まあ……」

「うん。何と云うか」

「？」

「「やる事無かったから、カミヤん（上条君）を弄りに来た」「
「うすうす感ずいていたよバカヤロー！」

本当にそれ以外やる事無かったのかよ暇人共ッ!?

ゴツンつと机に頭をぶつけて、それから顔を上げたくない気持ちになった。周りの連中はやれやれだとか、大丈夫？ だとか、呆れるやらイチオウ心配するだけだ。

……不幸だ。

そう心の中で口癖になった三文字を呟いた時、

「……うわっ、マジで幸薄そう……。お前が上条で良いか？」

不意に聞きなれない声が俺を呼ぶ。
だるそうに顔を持ち上げると、

「……イケメン」

「イケメン？」

中性的な顔立ちで背が高く銀髪で赤と青のオッドアイの外人さんのイケメンが土御門たちを掻き分けてやって来た。

この時点で俺が抱いた印象は、

(……かなりモテてんだろうなあコンチクショウ)

人間、ここまでイケメンになれるんだなあ、と内心でコメントを

している。目の前のイケメンさんが話を切り出してきた。

「まあいいや。俺は折原おりはらってんだ」

目の前のオッドアイの外人さんは意外にも日本人らしい。ハーフだろうか？

話を聞くと、折原は最近どっかのクラスに転校してきたらしく、魔帆良まほりの地理がさっぱりだそう。それで、魔帆良案内をしてもう人に急用ができて来れなくなったので、たまたま俺を見つけて頼みに来たそうだ。

「こつちも結構困ってた。頼むよ。な？」

手を合わせて頭を下げる折原。まあ、放課後は俺も暇だし親友共ひまじんどもから解放されるしな。

首を縦に振ろうとした瞬間、俺の後ろに回った土御門の腕が俺の首を捕らえ、押さえつける。

「いだだだだだだだだだだ　っ！？　つちっ、裏切ったなあ！」

「ちよつち黙るにや〜。折原つつたか？　少しこいつと話すから待ってくれ」

ずるずるとチョークスイーパーを決めたまま教室を出て廊下を渡り、階段を降りその階段の下まで引き摺る土御門。

ようやく解放され肺に空気を取り込む事が出来たのに小さな感動を感じたが、それよりも、

「どうしたんだよ？　何もここまで連れてくる必要ねえじゃねえか」
「その前に俺の質問が先だ。何であいつの話を引き受けようとした？」

「一体何なんだ？」

俺はただ折原の手伝いをするだけなのに。

「……カミヤん、今の聞いて嘘じゃないと思ってるのか!? 胡散臭さがLevel^{レベル}15だぞ!？」

「いや、お前に胡散臭さ語られても……」

あとLevel15って何だ。

それに胡散臭い奴でもそいつの言う事が全部嘘だって事は無いんじゃないか？

「折原が俺に嘘を言った所で誰の得にもならねえし、……まあ、騙された時は俺が悪いわけだし」

「……ハア、わかったわかったわかりましたにや。だが、もしカミヤんに何かあっても俺は保障しません」

「言つたる？ その時はその時だって。折原も大変だよなあ。見知らぬ土地で友人も無く孤立無援でさ」

「フンっ、単純王め」

何で土御門が折原を警戒してるのかわからないけど、納得はしているみたいでよかった。

こうして俺と折原の魔帆良案内ツアーが始まったわけだが……後に酷く後悔する事になるとはこの時は思いもしなかった。

所変わってここは魔帆良学園にある女子中学校のとあるクラス。傾きかけた日差しが人気の少ない教室を茜色に染める。

その中で10歳ぐらいのフランス人形のように可憐な少女が、そのさらさらの金髪を夕日の光を反射させて、

「……鬱だ……」

彼女の何処か大人びた雰囲気をもぶつ壊すぐらい落ち込んでいた。今、ずくと暗い空気を纏わせた彼女に近づきたいと思う人間はあまり居ない。

『いい加減腹括つたら？』

『人間は』だが。

「うるさい……昨日またいちゃもんつけられた。そして私はそれに返してしまった。そんな昨日の私をぶん殴りたい」

『……元はと言えばさ、あんたがあの子の子供にちよっかい出したのが悪かったんじゃない？』

「言いがかりだ！ あのちびっ子が暑そうだったから氷を出しただけなのだ！」

『……その氷が夏の暑さで溶けてびしょびしょにしてどの口が言うかっ』

「それも……不可抗力だ。あの日が猛暑だったのが事が悪い」

『もう支離滅裂になってますよ、エヴァンジェリンさん』

金髪の少女は、どうやら自己嫌悪に陥っているらしい。

エヴァンジェリンと呼ばれた金髪の少女は自分の傍に立つ二人を睨みつける。強気な口調でエヴァンジェリンに指摘した少女は化粧がいらぬ程度に整った顔立ちで、肩まで届く短めの茶髪にヘアピンを止めている。暇そうに指で何処かのゲームセンターのコインを弄くっていた。

消極的にエヴァンジェリンに口出ししたもう一人の少女は、髪色

が白に近いほど薄く前髪を整えたストレートロング。彼女も整った顔立ちで、教室にいる者達の中でただ一人セーラー服を着ていた。そして、その二人は半透明で彼女達を通して向こう側が見えるほど透けている。

更にそこへ、魔帆良女子中の制服を着た、エヴァンジェリンと同じぐらい緑色の髪を伸ばして、耳に謎のアンテナを付けた無表情な少女が入ってくる。

「マスター、夕飯の準備があるので先に帰らせていただきます」

すたすたと教室を後にする緑髪の少女の背に「ちゃちゃまるうー！ 貴様、主を見捨てる気かぁー！？」ともう普段の威厳とか木っ端微塵に砕けてんじゃね？ と周りが思うぐらい退行した罵倒をぶつけるエヴァンジェリン。その後ベチャーと机に突っ伏して動かなくなった。

一連の出来事を眺めていた二人の幽霊は、互いに眼を合わせふうとため息を吐く。

『喧嘩するほど仲が良い、って事？』

『毎回顔合わせてるみたいだし、本気で嫌ってるわけじゃ無さそうだし……』

(……なあにしみじみ語り合ってたんだろうかウチの背後霊達は)

赤い髪を後頭部に纏めた、成績優秀にしてクラスNo.4の巨乳を誇り 二人の幽霊に取り憑かれた不幸な少女、朝倉和美。

彼女は今日も幽霊達に振り回される日々を送っている。

「あつちに見える白い建物は制服店で、仕事が速いのが売りなんだ。あと病院はこつから1.5km北に行った所にあるから覚えといった方が良い」

「……へー」

やばい。大体の場所を案内したから話すネタが尽きてしまった。というか制服店とか病院とか俺がいつも使用してる施設ってだけだろ。普通の人はそんなに使わねえだろ。

内心で愚痴愚痴と自分に向けて文句を言うがどうにもならない。折原のすつごいつまらなそうな顔を変えることは出来ない。

(何である時請け負っちゃったのかなあ?)

「……ごめんな。あんまり良い所が思いつかなくてさ」

「あ？ ああ、別に何とも」

素っ気無い返事が返ってきた。かなりウンザリしてるのだろうか。つと、

「いけねえいけねえ。こつから先は女子校エリアだったな……」

「女子エリア……だつと……」

ここに住んでる俺でさえこの中世の西洋風の街並に迷う。気付いたら女子校こじエリアに着ていたのはその為だ。

俺はここから一刻も早く離れたい。というか、ここじゃ碌な目に遭わなかったから。

と言うわけで。

さつさと立ち去ろうと回れ右をして前進しようとした時、

「折原、さつさとかえ……折原？」

後ろを向く。折原は居ない。左右を見る。折原は居ない。意味も無く上と下を見上げ見下ろす。もちろん折原は居ない。

何処にも居ない。まさかと思い、そこら辺をホツツキ歩いていたタンクトップの上にフード付のフリースを着たみすばらしい印象を受ける女性を見かけて訊ねてみた。

「あの〜、すみません。銀髪でイケメンな外国人見かけませんか？」

女性は露骨に、というか忘れたいほど嫌いな奴を目の前にしてさつさと離れるクソツたれというような表情で女子中エリアを指差した。

あんまり思いたくないけど……会った事も無いはずなのに目の前の女性を好きになれない。

黙って会釈して、残念な思い出しかない魔窟へ『不幸だ……』と呟きながら足を踏み入れる。

部活生が活動を行うグラウンドから体育館の裏までくまなく探したが折原は見つからず、日の色が鮮やかな茜色に変わる。いわゆるマジックアワーと言う奴だ。

しかし見ている俺の気持ちは滝のように落ちている。女子校エリアに男子生徒が一人でいたら、注目を集めるのは当然と言えるか。

「折原〜……早く出て来いよ〜……俺、もうB.P（原）が限界まで来てんだからさあ〜……」

我ながら何を言ってるかわからない、けど思考を維持できてるな

らまだ大丈夫かも……。

痛い視線が刺さる中、折原の搜索を続行していると、プレハブとプレハブの間からあの特徴的な銀髪が垣間見れた。

「折原！」

銀髪が見えなくなった瞬間に俺は走ってプレハブの向こう側へ移動した。もちろんすでにいなくなっていたが、歩く風でたなびく銀髪が曲がり角に消えるのが見えた。

俺はそれを追う。すると、

「あれ？」

曲がった角にはドアだけしかなかった。恐らくだが、折原はここに入ったのだろう。

迷う事無くドアノブを握り、回して

「そこで何してるの！」

へっ？　と声にした方向へ顔を向けたのと、ドアをひくのは全く同時だった。

何処かの部活着を着たイマドキの女子高生数人が、信じられないという表情で俺を睨みつけていた。

「もう一度聞いわよ。そこで、何してるの？」

もう一度凄みの聞いた声で俺に問いかける女子高生。何をしても何も、折原がこの中に入ったと思って探しに来たんだが……。

「……それは本当？ 信じる要素が全く無いんだけど」

……最近の一般人って人の心を読むんだらうか？ 魔帆良すげえ。

というかさつさと折原見つけて帰りたいんだけど。

「前を向くな！ その体勢のまま手を上げて身体をこっちに向けなさい！ 速く！」

日常生活でそんな命令を言われたのは初めてだ！

待て、ドアの先に一体何があるんだよ！？

冷静に考えて、サアアアと自分の顔が青ざめるのを自覚した。

「……………一つ聞いて良いか」

「何？」

「弁護の余地は」

「あるわけないじゃない」

「ですよねー」

不幸だー、と小さく呟いた直後にぼーん、と部屋から色んなものをぶつけられた。……折原はどこ行った……？

女子更衣室の屋上からその様子を見ていた折原は、ハメた少年を嘲笑いながらこの世界を分析していた。

「やっぱアイツは本物の上条当麻か。ネギまととあるのクロスかよ、馱神め」

自分を転生させた（自称）最高神に悪態をつく。

そう。

彼もまた自然の摂理から外れ、この転生あそびを楽しんでる一人だ。

「フラグメイカーが増えちまって倍率も高くなってんだよなあ……。
ネギは抹殺するけど、上条さんはなあ」

ヤツチマウカ、社会的ニ。

彼は自分に世話を焼いてくれた人物を貶める為に打算する。

やっと事情聴取から解放された。ポコポコにされないだけマシだったけど。

辺りはもう真っ暗。寮の門限はとつくに過ぎてる。不幸だ……。
腹も減ったし気分転換に超包子で何か食べて

気楽な事を考えていた途中、辺りの雰囲気、というか空気が変わったのがわかった。

不良に絡まれた時に感じる、敵意剥き出しの空気。そんな感じだ。直後、ゾクゾクと寒気がする冷たい風が真上から吹き降りてきた。俺の頭上に何かある。バツと見上げるとまた冷たい風が吹きつける。

そこで見たのは二つの『金色』。

片方はフランス人形のようにある種の芸術的な綺麗で妖しい美しさを感じる。

もう片方はゴミ溜めに落とされた宝石のように美しさが損なわれたもの。お世辞にも綺麗とは言えないがその存在感は確かなものだ。

その二つは争ってるようで、互いにぶつかり合っている。
しばし、俺はその光景に魅せられた。
爆発音や密度のあるものが落ちた音が辺りに響き、

『さつさと死ねよ吸血鬼！』

『うるさいわこの悪魔憑き！ 鬼絡みも大概に！』

『手前が死なないのが悪い！ ウチの娘に手エ出しやがって……！』
『待て！ それは結構前の事だろ！？ しつこいにもほどがある』

『！』

『だから死ねえ！』

『真祖は死ねんわ！』

……爆発音をBGMに聞こえた今の会話。
それを聞いて、何と言うか、すっごく冷めた。
二つの金色は俺の頭上を過ぎ去った後、森の奥へ消えて行った。

「……………」

今の『異常』な光景を目の当たりした俺は、

「俺は、何も、見てない」

上条当麻。

彼が裏の世界に入るのはまだ先の事らしい。

プロローグ その三（後書き）

3人目の主要人物はいわずと知れた上条さんでした。

上条さんってギャグにもシリアスにも適した万能キャラですね。能力もチートにならないし

結構前にも書いたようにオリキャラは随時募集中です。他人任せです。

感想・評価・指摘を待ってます。

どうしよう、更新の空白期間が開く一方……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3501s/>

魔法と魔術の転生劇

2011年11月10日06時08分発行